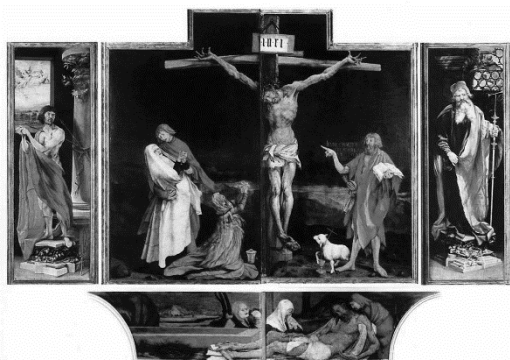


## 「イーゼンハイムの祭壇画」

社会学 ヴァイツェプト マリー (フランス)



コルマールはフランスのアルザス地方<sup>ちほう</sup>にあります。東はドイツとスイスに接<sup>せつ</sup>しています。アルザスはかつて神聖ローマ帝国<sup>しんせいりょうち</sup>の領地<sup>りょうち</sup>でしたが、17世紀から19世紀にかけては何度もフランスとドイツの領地争い<sup>まきこ</sup>に巻き込まれてきました。この地方で有名なものはワインで、特に白ワインがおいしいです。

コルマールはオー・ラン県<sup>けんちようしよざいち</sup>の県庁所在地<sup>としけん</sup>です。都市圏<sup>かんこうきやく</sup>としては約11万6千人の人口を有しています(東京ドーム2個分)。観光客<sup>かんこうきゃく</sup>が多く、特に日本の観光客に好まれています。川が流れていて、町の中心は《Petite Venise》、「小さなヴェネツィア」と呼ばれています。

コルマールは小さな町なので、美術館<sup>びじゅつかん</sup>の数は少ないです。しかし、有名な美術館、Musée Unterlinden、すなわちウンターリンデン美術館があります。なぜその美術館が有名なのかというと、「イーゼンハイムの祭壇画」<sup>しよぞう</sup>を所蔵しているからです。

イーゼンハイムの祭壇画<sup>が</sup>はドイツの画家、マティアス・グリューネヴァルト(Matthias Grünewald)によって祭壇<sup>か</sup>にかかれたものです。かつてはコルマール近くのイーゼンハイムの施療院<sup>せりょういん</sup>の礼拝堂<sup>らいはいどう</sup>にありました。制作はルネッサンス時代、1511年 - 1515年頃とされています。

祭壇<sup>とびら</sup>は扉の表裏に絵が描かれ、扉の奥には聖アントニウスの木像<sup>あんち</sup>が安置されています。扉を閉じた状態の時、中央と左右のパネル、それにプレデッラ(祭壇下部<sup>かぶ</sup>の横に長い画面)の4つの画面が見えます。中央パネルは凄惨な描写<sup>せいさん びようしゃ</sup>で知られるキリスト磔刑像<sup>たつけいざう</sup>です。中央パネルを左右に開くと「キリスト降誕<sup>こうたん</sup>」を中心にした別の絵画<sup>かいが</sup>が現れます。そこにある扉をさらに開くと、中央には聖アントニウスの木像<sup>ずし</sup>を安置した厨子<sup>ずし</sup>があり、左右には別の絵画パネルが現れます。この画面は、聖アントニウスの祭日<sup>こうかい</sup>のみに公開されていたものです。

なぜこのような絵が描かれたのでしょうか。中世時代<sup>ちゆうせいじだい</sup>、ヨーロッパではペストとハンセン病と並び、中世三大疾病<sup>さんだいしつぺい</sup>といわれていた「聖アントニウス病」、または「聖アントニウスの火」(医学的には麦角中毒と呼ばれるもの)がありました。それは死に至る難病<sup>いた なんびょう</sup>でした。当時、この病気を治癒する唯一の方法は、聖アントニウスを祀った教会へ巡礼<sup>まつ</sup>し、祈ることだけでした。そこで、病<sup>ちゆ</sup>に苦しむ患者<sup>ゆい</sup>の癒し<sup>いづ</sup>になるよう、画家に絵が依頼<sup>まつ</sup>されたのです。ですから、『イーゼンハイムの祭壇画』は、人々の心<sup>およ</sup>に及ぼす「癒しの力」について考えさせてくれるものです。

私はこの絵を子供の頃にはじめて見たとき、この祭壇画<sup>みりよく</sup>の魅力<sup>みりよく</sup>があまり分からず、ただ「怖い絵」だと思っていました。キリスト磔刑の絵はとてもインパクトがあり、苦しみが伝わってくるからです。今になってこの絵画<sup>あらた</sup>を改めて見ると、画家の「患者<sup>かんじゃ</sup>の病んだ心を癒したい」という気持ち<sup>つよ</sup>が強く伝わってきます。そして、もう一度キリスト教について勉強<sup>べんきやう</sup>をしたいとも思いました。